

殘

照

銀屏宮代通白

殘

照

根岸公代遺句歌集

道句歌集 残照

平成元年三月六日発行

著者 根岸 公代

発行人 根岸 善司

〒三六九―〇一

埼玉県北足立郡吹上町本町三一七―一八

印刷所 株式会社・共立社印刷所

# 序

公代さんが急逝してから、早や七回忌がめぐってくる。その来年の三月を期して、ご主人の根岸善司氏が亡き妻の追善供養のために『根岸公代遺句・歌集』を上梓することになった。

公代さんとの句のえにしはデパートの俳句教室へ来られたことである。その第一期生の「かわせみ句会」の優等生の中のひとりであった。そして、昭和四十九年に「あした」へ入門してくれ、本格的に作句するようになった。毎月の投句作品はめきめき上達し、五年後の昭和五十三年十月号の「あした」の巻頭を次の作品で占めた。

ひまわりの日に従へぬ大伽藍

向日葵や孫に真つ赤なまり買ひぬ

忘れ得ぬ日よ実石榴を青き壺に

さはやかに穂立ちてうつり行く刻よ

立秋の昨日のままの地の余熱

秋立つや梁のどじょうのつぶやきに

の六句であった。第一句の、しっかりとした叙景の目と、二句目以下の句に見られる、しっとりとした抒情が公代俳句の本領であり、翌年には五十三年度の新人賞を受賞した。今、存命なら当然、同人として活躍していてくれたであらう俳人としての、高い資質の持主であった。ところが、句友であった堤まさ子さんが、昭和五十四年に急逝し、ひどいショックを受けられた。心臓が少し悪かったからでもあるが、それからは、ご主人の

事業である梱包材料加工販売の仕事を手伝うかたわら、暇を惜しんでは作句に作歌に打ち込むようになった。五十四年の冬には

残照の冬野しみじみ命惜し  
と詠んでいる。

今度、遺句・歌集の編集に当たり俳句と短歌の遺稿のノートをご主人から見せていただいたが、その勉強と努力ぶりにほとほと頭が下った。そして、自分の早逝を予期していたかのように、作品の整理が行届いていた。だから、遺稿の編集は作品を更に厳選するだけで済んだし、晩年は、作歌はやめて作句にしばって精進していたことも解った。ここで、初期の作品から急逝されるまでの足かけ十年間の句業の中から秀れた作品を挙げてみよう。

薬玉の割れし如くに櫛落葉

筑波嶺の彩を重ねて初蛙

音立てて星こぼれ落つ冬城趾

行く秋や黄色く渴くワニの口

生命あるごとと新年の古時計

〈薬玉の〉にみられるように、五句とも、しっかりと景を把握して、自分の発見を言葉にしている。二句目の「彩」と蛙の初声の取合せなど感覚的にすぐれているし、〈新年の古時計〉とは、言い得て妙である。

抒情句としては、

高笑ひして虚ろなり春の夜  
野焼く火が心の扉打ち叩く  
掌に溢る黒髪がほし春の夜  
春寒の胸のガラスにひびはしる  
流れゆく季へ手を振る秋のうぜん  
やはりまだどこかに虫の居る夜寒  
余生てふ言葉しきりや暮の秋

どの句も言葉におぼれないで情をのべている。なお境涯句もあったが、短歌の方に譲った。短歌集を詠まれれば公代さんの人柄が十分に偲ばれる。短歌も浜梨花枝先生に師事してから佳吟をものにするようになったことが解る。

こうして序文を書きつつ、あらためて公代さんという秀れた作家を失ったことを痛恨に思う。それにしても、ご主人の公代さんへの追慕の深さに感動した。遺稿を全部集め下書きされた。その善司氏に敬意を表すると共に、公代さんのご冥福をお祈り申し上げる。

昭和六十三年十一月

宇咲 冬男

# 目 次

序

宇咲 冬男

一

俳句集

薬 玉

昭和五十年

一四

父祖の地

昭和五十一年

一八

今日の幸

昭和五十二年

三二

真赤な毬

昭和五十三年

四八

残 照

昭和五十四年

六〇

琴 糸

昭和五十五年

七六

湖めぐり

昭和五十六年

八六

八千代獅子

昭和五十七年

九六

忘れもの

昭和五十八年

一一〇

短歌集

風 影

一一五

旅 空

一三七

父・母・兄

一五五

故 郷

一七一

孫 ・ 娘

一八一

うから友垣

一八九

随筆 牡丹に寄せて

著者

二〇四

母の思い出

根岸利江

二〇八

あとがき

根岸善司

二一一



殘

照



俳  
句  
集



藥

玉

昭和五十年

髪梳きて夜の椿に凝視らる

秋そうび濡れて淋しき刻流る

やがて散る無患子金の鈴束ね

薬玉の割れし如くに擲落葉